

## ”ある生徒との話”

「クラスのみんな、学校を休んでいた自分を変な奴だと思ってるんじゃないかと思うと、教室に入っても頭を上げられない。」

「誰かそう言ったの？」

「いや、言わないけど、絶対そう思ってる。」

「友だちに聞いたの？」

「ううん。でも、僕が教室に入っていくと、ヒソヒソ話してるんだもん、絶対にそう思う。」

「そりゃあ、確かに怪我や病気とかはっきりした理由で長く休んでいたら、みんなも『大変だったね。』なんて声を掛けてくれるかもしれないが、理由が分からないと、『どうしたんだろう？』と思う子もいるかもしれないね。」

「そうだよ。『あいつ、おかしいんじゃない。』って、絶対話してるよ。」

「そうだね、そう言った子もいるかもしれない。でも、中には、『僕達が何か来れなくなるようなことをしたのかなあ？』って話し合っている子達もいるかもしれないし、『中学校最後の体育大会もあるから、もうそろそろ来ないかなあ？』って待っている子だっているかもしれない。そりゃあ、ひとりひとり確かめなくっちゃあ分からないよね。でもね、もう2学期も始まったし、ましてや今日は”学調”(静岡県校長会主催の中3の学力調査試験)の日。このところはそれどころかみんな試験勉強に必死で、そんなこと考えている余裕がないかもしれないね、現実は。」

「・・・・・・・・・・」

「誰だって、特に14,15歳の頃は(この歳に限らないが)みんな、自分をよく思われたいと思っているよ。だから、勉強して少しでも頭がいいって思われたいし、部活で活躍して格好いいところを見せたいって思う。でも、いつもいつもうまくいくとは限らないし、時にはみんなの前で失敗して恥を掻くことだってある。だから、みんな自分と同じ仲間だと思うんじゃないかな。」

「だって、あんなに学校を休んだら(今年の2学期の途中から3学期までのことです)、誰だってへんな奴だと思うよ。」

「そお?そんな風に誰かに言われたの？」

「・・・・・・・・・・」

「じゃあ、君は、自分のこと、本当にへんな奴だと思ってる？」

「うんなわけないじゃん。」

話しかけると、必ず彼は隣の母親の顔を見る。母親はそんな彼に、”自分から話せば”と身振りで促す。

「そうだよね。勉強だって、あんなに休んでいたって期末には40点台(50点満点)を取れるんだし、決して学力的にも”へん”じゃあない。ただ今は長い休み(夏休み)があっ

てみんなと会ってないから、またちょっと周りの目が気になりすぎているんだろうね。

誰だって暫く会ってないと、〇〇ちゃん、どんなふうになってるんだろう？とか、みんな、こんなに日焼けした自分を見てびっくりするんだろうなあ、とか気になるもんだよ。だから、みんなに会うのが楽しみなんだよね。どうかなあ？

ある意味で”開き直り”が必要かもしれないね。『何を言われても、どう思われても、これが俺なんだ。』っていう気持ちがね。だって、それが現実だし、隠しようもないことだもんね。」

「う～んもお、明日は学校に行こうかなあ。こんなことしてたって・・・」

「どんなこと？」

「学校休んで寝てたら、ますます”へんな奴”じゃん。」

「”へんな奴”って、自分で自分を、そう思ってたの？」

「・・・・・・・・・・」

「教室に入ってもどうしても顔を上げられないほど苦痛に感じることも事実だし、ちゃんとした理由だよ。そうした気持ちが癒えるまで休んでいることも、決して”へん”じゃあないよね。」(5日)

あれから3日目。どうしてるんだろう？彼は(8日)

一昨日、電話でその生徒と話をした。まだ学校には行かれない状態だった。5日に話した後、少しは気持ちがすっきりして勉強もし始めたというが、ちょっと分からなくなると、気持ちがイライラしてきて続かなくなってしまったという。しきりに”もう僕は高校には行けない”という言葉が出てくる。そんな自分に苛立つ。友達も1人か2人で、このところは全く会っていない。自分への見方が気になって、自分からは話しかけたり、誘ったりはしないという。15分ほど、彼が話したいだけ聞いた。最後に「そんなだったら、またこっちにおいでよ。」と言って電話を切った。

1年半程前かある教材出版社の方から頂いた木村茂司氏の論説のコピーを思い出した。氏は、愛知県で学習塾を経営する傍ら、不登校の相談を受けておられる。氏も書かれておりますように、不登校の生徒はまずは神経過敏である。彼の話、そのままである。その是非が問題ではない。だから、まずは安心させることが大切なんです。 (14日)

2000年9月5日(火)、8日(金)、14日(木)付け「ひげぐま先生のひとりごと」から